

議論初心者の大学生を対象とした議論スキルの指導法

Teaching method of cultivating argumentative skills for novice college students

中野美香
Mika Nakano

福岡工業大学
Fukuoka Institute of Technology
nakano@fit.ac.jp

Abstract

In recent years, argument has been receiving increasing attention from educational researchers as a means of exploring human interaction. Previous studies have focused on how social influences affect development of reasoning, regarding argumentation facilitates deep understanding and elaborative. However, empirical studies about teaching method of argument are scarce and its effect has not been sufficiently tested yet. The goal of this study was to introduce the curriculum of argument education for freshmen with no experience of debating, and to examine the change of students through the course. 98 college students participated in a series of experiment. Finding indicated the difference of students' attitude toward debating between pretest and posttest.

Keywords — Argument, Debate, Teaching method, College students

1. はじめに

近年、国際的に議論についての理論的、実証研究が注目されている。認知発達、思考、教授・学習などの領域では、議論を思考スキルや思考過程を捉える枠組として、研究が活発におこなわれるようになった。ここで言う議論の範囲は、学校の中の生徒同士や生徒と教師の対話から、学校の外の実生活における多様な対話まで多岐にわたる。どのような状況であっても民主主義社会においては、個人が日常を取り巻く情報に対して批判的に判断を下すために、議論を理解することは重要な意味を持つと考えられる。

これまで議論に関する先行研究の多くは、議論によって獲得や促進される対象を明らかにしてきた。一方で、学生の議論力の低さを報告する研究は比較的多くあっても、議論のスキルをどのよう

に身に付けるかを検討する研究の数は少ない (Kuhn & Pease, 2008)。その中でも、ゴールが不明確な短期間の実験ではなく、長期的かつ構造化されたプログラムによる議論訓練によってスキルがどのように獲得されるかについての知見はほとんど蓄積されていないと言える。

中野 (2007) では、議論の訓練を目的とした実践共同体に属する大学生を対象に、初めて議論の練習に参加してから約 1 か月間の議論スキルの初期段階の変化を明らかにした。その後、この研究を基に議論の初期段階の熟達化モデルを作成し、目的や対象者に応じた議論教育のカリキュラムを開発している (中野, 2009)。本研究は、(1) 正規の大学の授業として開講された工学部の授業における議論の指導法を紹介し、(2) 特別な議論学習の経験のない大学新一年生を対象にした、半年間のディベートの訓練による学生の議論スキルと認識の変化を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

本研究の対象者は、福岡県内の大学の工学部に在籍する学生 98 名である。学生は 1 年次前期必修科目として、2007 年 4 月から 7 月の間、議論法を学習する授業を受講した。この授業では、議論に必要な態度や考え方から、一通りディベートができるまで段階的にプログラムが構成されている。全体としては 1 年間の教育プログラムであるが、学生の初期の変化を明らかにするため、本研究では前期の授業のみを分析した。調査は受講者全員を対象に、授業開始時 (2007 年 4 月) と

終了時（2007年7月）に質問紙法と面接法により実施した。

授業は、大学生の議論の熟達化過程に基づいて、試験と試験後の反省学習の授業を除く13回分の講義を導入期、発展期、応用期の3期に分けた。第1回～第3回の導入期では、授業の方針や進め方に関して説明し、自己理解を深めるための練習をおこなった。第4回～第7回の発展期は、考えを整理するために主張と反論の基礎的技術を身に付け、論理的思考を育成する練習をした。第8回～第13回の応用期は、ディベートを通して議論の実践的なスキルを育成した。

3. 結果と考察

詳細については分析中であるが、学生の議論に対する認識の変化の結果の一部を以下に示す。この質問項目は、議論スキルが議論志向性と相関があると示唆された中野（2006）の研究結果を基に、議論に対する肯定的なイメージと議論スキルの相関を見るために独自に設定した項目である。7つの質問項目について5件法で質問した：「問1 ディベートは得意だ」「問2 ディベートをするのが好きだ」「問3 ディベートはきちんと習えば誰でもできる」「問4 ディベートができるようになりたい」「問5 ディベートができるようになることは重要なことだ」「問6 ディベートは将来役に立つと思う」「問7 ディベートができたらかっこいいと思う」。

授業前後の回答の平均値を図1に示す：問1 ($t(97)=1.36$)、問2 ($t(97)=5.39$)、問3 ($t(97)=2.58$)、問4 ($t(97)=5.57$)、問5 ($t(97)=5.88$)、問6 ($t(97)=6.63$)、問7 ($t(97)=4.92$)。授業前に最も低かった項目は「問2 ディベートをするのが好きだ」である。一方、授業後で最も低かった項目は「問1 ディベートは得意だ」であった。各質問項目の平均の差を比較すると、問1：0.13 ($SD=.95$)、問2：0.49 ($SD=.89$)、問3：0.29 ($SD=1.09$)、問4：0.53 ($SD=.94$)、問5：0.52 ($SD=.87$)、問6：0.56 ($SD=.83$)、問7：0.29 ($SD=.58$)であった。

学習者の議論に対する苦手意識を克服することは容易ではなく、議論教育をおこなったところで学習効果が上がりにくいことが様々な授業実践で示されている。本発表では学生の主観評価に加えて議論スキルの客観評価の結果を示し、プログラムによる学生の変化を足がかりに議論教育の課題と展望について論じたい。

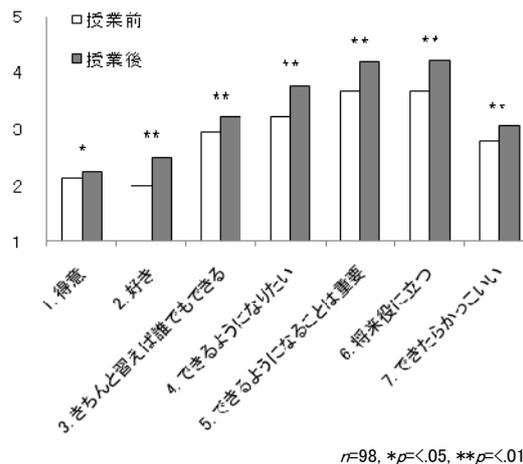


図1 デイベートに対する認識の変化

参考文献

- [1] Kuhn, D. & Pease, M., (2008) "What Needs to Develop in the Development of Inquiry Skills?", *Cognition and Instruction*, Vol. 26, No.4, pp.512 - 559
- [2] 中野美香, (2006) "日本人学生の議論能力を規定する要因の検討—アジアのパラメタリー・ディベート大会を対象に", *新たなコミュニケーション学の構築に向けて—日本コミュニケーション学会創立35周年記念論文集*, pp. 61-73
- [3] 中野美香, (2007) "実践共同体における大学生の議論スキル獲得過程", *日本認知科学会*, Vol. 14, No. 3, pp. 398-408
- [4] 中野美香・高原健爾・梶原寿了, (2009) "理系学生のコミュニケーション能力の育成を目的とした教育設計", *電気学会論文誌 A*, Vol. 129, No. 5, pp.379-385